

# 幸福学園村の構想(一)

## ヤマギシズム幸福学園設立準備委員会

### 幸福学園村の生活

ヤマギシズム幸福学園は、普通の通学する学校ではなく、また、主として政府の補助金に頼る社会福祉施設でもありません。入園者は全員学園内で生活することになりますから、入園者とその生活を世話する人、保母や教員、食糧や食肉を生産する人、その家族となると四百人を越すひとつの村になってしまうのです。そして、できるかぎり村内で自給していくようにすると、それこそ産婆さんからお坊さんまで、普通社会でのひととおりの職業が必要になります。

学園村では、このあらゆる職種の人が、べ

つべつに給料をもらって生計をたてるのではなく、村ぜんたいが財布ひとつの一体生活でみんな仲良し一家として生活していこうというのです。自分の財布をもたなくても、その村にあるものは必要に応じて何でも使えます。豊かな物資と親愛の情にみちた理想社会のひながたをつくろうというのです。幸福学園のからだであるこの学園村が正常であってこそ幸せな子どもの樂園が生れるのです。この村づくりの構想を、みんなで練りかためようではありませんか。

自然環境では、どういう場所がよいのだろうか。

その村の仕組みをどのようにくみため、ど

のように運営するか。

そこに住む人は、どのような心で、どのように生きるのか。

構想をえがくだけでも楽しいことです。衆智を集めて構想を練る過程で、まちがいや思いこみやきめつけは是正されていくでしょう。以下に示そうとする計画は、各地のヤマギシズム生活実地での十数年間の経験にもとづいて組立てたもので、報告書的女性格がよく、おそらく実現段階で大部分は変更修正しなければならぬでしょう。学園村の実現は計画書がするのではなく、実際につくる人が実現するのですから、これはあくまで参考にしていただければよい、と思うのです。

# 幸福学園村の規模

## 一、人員

1 入園者	九〇名
乳児・幼児	一〇〇名
少年少女(ほほ小中高校生の年令)	三〇名
肢体不自由者(成人)	三〇名
老人	二五〇名
小計	二五〇名
注：乳幼児・児童の約半数は要保護児・心身障害児である。	
2 スタッフ	二五名
保母・保父	二〇名
教員(養護教員ふくむ)	二〇名
老人・身障者の世話係	一〇名
調理・洗濯等の係	二名
医師	一〇名
看護師	一〇名
事務(経理ふくむ)	七三名
生産事業	一七〇名
小計	一七〇名

## 二、土地

1 建物敷地	三ヘクタール
2 運動場・プール等	三ヘクタール
3 生産事業用地	二八ヘクタール
合計	三四ヘクタール

## 三、事業規模

1 生活資金必要額  
構成員一人当り月額一万五千元(月額一八万円)として、

七五六〇万円

注：この中に自給食糧分は入っていない。

2 自給食糧の栽培費及び加工事業費年額 約八〇〇〇万円

3 学園村運営費及び発展費年額 約一〇〇〇万円

合計一億六千五百六〇万円位を事業収入としなければならぬ。

## 四、生産事業計画の概要

- 1 鶏  
実頭用鶏舎二五連二〇棟。成鶏換算常時六万羽。卵年間六六〇トン生産。土地三ヘクタール。必要人員一六名。利益三二〇〇万円。
- 2 鶏肉・卵の販売

卵六六〇トンの小売、肉二九〇〇キロの肉処理と販売。必要人員一七名。利益三二〇〇万円。

### 3 豚

種豚母豚七五頭、年間仔豚一三五〇頭。肉豚常時四五〇頭。土地一ヘクタール。必要人員三名。利益八〇〇万円

### 4 肉牛

肥育牛常時一〇〇頭。土地〇・五ヘクタール。必要人員二名。利益五〇〇万円。

### 5 乳牛

常時乳牛五頭、育成牛二頭。土地〇・五ヘクタール。必要人員一名。自家用。

### 6 米

約六五〇俵。土地八・七ヘクタール。必要人員四名。自家用。

### 7 野菜

詳細別項。土地二・五ヘクタール。必要人員四名。自家用。

### 8 果物

詳細別項。土地〇・五ヘクタール。必要人員一名。自家用。

### 9 飼料作物

鶏緑飼、牛用牧草、魚粉製造、特殊飼料製造。土地六ヘクタール。必要人員七名(う

ち四名が魚粉・特殊飼料製造)。利益一〇〇〇万円。

### 10 特殊作物

土地条件によって業種が変わってくる。土地二ヘクタール。必要人員五名。利益一〇〇〇万円。

### 11 運輸

必要人員三名。利益五〇〇万円土地面積合

計

二七・二ヘクタール

必要人員合計

七三名

利益合計

一億五〇〇万円

注：この計画には入園者の払う学費(寄宿費・食費をふくむ)および政府・地方自治体からの援助を計上していないので、約六〇〇〇万円の赤字になる。これを機械的に入園者にわりふると、一人年間二四万円(月額二万円)



山岸会春日の子供たち

## 幸福学園村の食糧自給計画

### 1 米

八・七ヘクタールで反当七・五俵として全収量六五二・五俵(一俵は六〇キログラム)うちモチ米三〇俵一人平均一日二合、年間二割の七五日は米以外の主食とし、余分は嗜好品に使う。

### 2 野菜

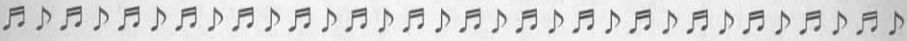
二・五ヘクタールの畑でつぎのような収穫をあげる。

ホーレン草二六〇〇kg(蕪、以下同じ)、キャベツ四八〇〇kg、ネギ三五〇〇kg、ニンジン一六〇〇kg、アスパラガス二五〇〇kg、ジャガイモ五五〇〇kg、玉ネギ三六〇〇kg、赤玉ネギ一〇〇〇kg、キウリ二二〇〇kg、ナス二二〇〇kg、トマト二九〇〇kg、ピーマン五〇〇kg、サツマイモ五五〇〇kg、ゴボウ一三〇〇kg、漬物用ダイコン一四〇〇



# キブツの一日

千葉 幸広



朝の六時、冷たい風が教室にかけこむ私の目をこする。一月ともなるとイスラエルも寒い。例によって遅れて来た私にむかって、先生のアリエが「やせっぽっちの君には太った女の人が必要だ。夏の暑い時は日蔭を作ってくれるし、冬の寒い時は、おおいっくして暖をつくってくれる」といつものように冗談を言い、彼の授業が始まった。

彼の教え方は、ジェスチャーをまじえ、黒板に巧みに描く絵によって、その場に於ける言い方を覚えさせようとする。文法など、一切おかまひなしだ。六ヶ月以上過ぎたときは勿論のこと、はじめて授業のあった日からこんなやり方である。教室に初めて入って来た彼が「シェミール アリエ」（私の名前はアリエです）とやり始め、我々は全くとまどってしまったことを今でも覚えている。彼の指導のおかげで、このキブツに来た日本人のほとんどが、ヘブライ語をよくしゃべるようになった。

朝食のあと、労働着に着換えて、九時に雪どけを思わす雨あがりの泥んこ道を通って鶏小屋に着き、私の労働がはじまる。私の世話する鶏は約三〇〇羽、一人で一日四回の卵集め、餌くばり、その他鶏小屋の雑用をする。

雄と雄の喧嘩は実に美しく面白い。首の回りの羽毛を両者逆立ててにらみ合い、えり巻のファッシュンジョーを見ているような気分になる。もつとも喧嘩している当事者達は、怒り狂ったようにどなり合っている。これが、雄と雌のケンカとなると、雄は弱い雌の上に乗らなっていて首をつつく。そんなことで毎日四、五羽が死んで行く。

昼食を食べに食堂へ行く途中、うしろからみち子とエリメレフの声が聞えた。エリメレフは、私のファミリアの父親である。どういうわけか最近ぼけて来て、一緒に遊びに行くみち子と私の名を混同する。そこで私は「何？ ユーデイトノ」と彼の奥さんの名でたづね返す。そしたら、今日お茶を飲みに来いということだった。

午後の仕事で、最後の卵集めをしていると背後に殺氣を感じた。ふり向くと、群を分けて一羽の雄が走って私に向って来る。にらみつけると向うは立ち止り、顔をそむけて知らぬふりをする。まあ大丈夫と思って卵を集めはじめると、いきなりそいつが、「どかーん」と体に当って来た。頭に来た私は、もちろん追いかけた。端に追いつめ、足で蹴とばそうとすると、ひるがえってうまくよける。その

- 本、炊事用ダイコン三六〇〇本、白菜一六〇〇kg、春ダイコン七〇〇本、パセリ五〇kg、ワケギ二五〇kg、高菜二五〇kg、サトイモ一〇〇〇kg、春菊四〇〇kg、ウマイ菜一〇〇〇kg、ニラ二〇〇kg、三ツ葉二三〇kg、小カブ一〇〇〇kg、ソラ豆四〇〇kg、エンドウ四〇〇kg、サラダ菜六〇〇kg、インゲン一〇〇〇kg、ニンニク七〇〇kg、レタス二〇〇kg、カボチャ二七〇〇kg、ラッキョウ一〇〇kg、ニューメロン一〇〇kg、スイカ二〇〇kg、小松菜一〇〇〇kg、雪白体菜七〇〇kg、山辛六〇〇kg、セロリ一三〇kg、日野菜四〇〇kg、ショウガ七〇kg、花野菜一五〇kg、水菜三三〇kg、ミブ菜二七〇kg、大カブ六〇〇kg
- (野菜月別作付表は省略)
- 3 調味料**
  - 醤油用 小麦二四〇〇ℓ、大豆一四〇〇ℓ、塩一四〇〇ℓ、(一番醤油二五〇〇ℓ、二番醤油一七〇〇ℓ程度)
  - 金山寺ミソ 大豆七〇〇ℓ、白米七〇〇ℓ、裸麦七〇〇ℓ、塩二〇〇ℓ、三〇〇ℓ、ヒシオミノ 小麦または裸丸麦七〇〇ℓ
  - 大豆七〇〇ℓ、塩四〇〇ℓ
  - ミソ汁用 大豆一四〇〇ℓ、白米一四〇〇ℓ

○ℓ、(または大豆一〇〇ℓ、白米一九〇〇ℓ)。裸麦一四〇〇ℓ、大豆一四〇〇ℓ (大麦を使用してよい)。いづれも塩七〇〇ℓ

**4 果物その他**

モモ・ブドウ・クリ・ウメ・ミカン (暖地の場合) いづれも一〇アール以上。

嗜好品として果実酒、梅酒、ジャム、ジュース等をつくり、また菓子類も自家製とする。

以上、いずれも畜産と作物の循環一体経営と、日光、空気、水、養分を有効に使い、土壌中の微生物の作用により、健全な作物を作る。農業、化学肥料の使用を最少限にとどめ、無「公害」食品を生産する。

ヤマギシズム農法、ヤマギシズム養鶏法によるので、土地は年々肥沃化、土壌は正常化して、日ならずして無農薬栽培ができるようになる。同時に米は一〇アール当り一〇俵(六〇〇kg)を越すようにつとめたい。米は最終的には不耕起散播にする予定で、それにより収量は飛躍的に増収し一〇アール当り一五俵も可能となる。

以上、いずれも三重県春日の十数年の生活からわりだした数字ですから、実際は作物の

種類も数量もかわってきます。

編集部注：これは前号に掲載した『幸福学園設立趣意書』をうけて目下作製中の計画書の一部です。

◎イスラエルのキブツとは？  
キブツのことを知りたいあなたへ。  
参考図書をお知らせします。  
(当協会でご扱っています。)

■キブツの記録 山根常男著  
誠信書房発行 七五〇円・送料一〇〇円  
キブツメンバーと生活を共にした著者が、キブツ内の日常生活、家族のようす、子供たちの生活など、わかりやすく綴ったキブツの入門書。

■もう一つの社会キブツ  
日・ゲーリング・ドラブキン著 草刈善造訳、大成出版発行 千円・送料一四〇円  
共同体の歴史をたどり、キブツの成立と発展、その社会構造及び、経済体制生活組織、教育文化活動等において、詳細に論じている。





殺された鶏の話を幾度か聞いた。

恐怖にくるった人間は残酷なものである。

私も一度は足で蹴とばしたものの、怒りはおさまらず追いかけたが、敵もさるもの、群の中へ入って、どれがどれやらわからなくなってしまう。その日死んだ四羽の鶏を焼却場へ運んで一日の仕事は終わった。冬が近づくにつれて一日一日と産む卵の数は少なくなっていく。私の世話している老鶏達は、近日中にエルサレムへ売られて行くと聞いていた。それから数日後、一羽もいない広いにわとり小屋に私は一人立っていた。

シャワーを浴びて落ち着いた所で、エリメレフの家へ行った。いつものように、たくさ

身の子供達が、がやがやわいでいた。五人の子供の中で、三才のやんちゃ坊主ガールは一家の大將。私に出された紅茶に顔を近づけ「なんとおいしいお茶なんだろう」と、いかにも本当に飲んだかのように感嘆している。彼のやんちゃぶりは、皆を笑わせ、また困らせる。  
キプツの夜は実に静かだ。行きかう人に、「シャローム」「エレブトープ（今晩わ）」とあいさつをかわし、ふと見上げる夜空には、北斗七星が浮き出ている。東京育ちの私には、小学校の理科の時間に習ったこの星が、実にめずらしく、美しい。

千葉幸広君は、第九回研修生として、昨年四月キプツ・ネティブ・ハラメッドへイに行き、半年のグループ研修のあと、キプツ・エイン・ハシヨフェットのウルバンでさらにヘブライ語を勉強し、アジア経由で去る四月二十五日帰国。



## イスラエル通信

### 人間回復の 気分を味わう

亀山博道

日本は春たけなわ、ツツジの季節です。東京は物価高で住みにくいときいています。我々キプツ研修生は経済問題の悩みもなく、人間らしい生活、そして、人間と人間との調和ある結びつき等をキプツを通して学び、本当に人間性回復の気分を味わっています。

我々一同にとって、この研修期間は、たしかに人生の分岐点となるであろうと推測しています。近ごろは、キプツそのものの実体について色々調査したり、キプツ内の各分野の専門家を呼んで勉強会をすることは、しなくなりりましたが、一人一人がキプツの内部に深く入りこんで、キプツの人達と仕事と生活の両面から共感共苦しつつあります。

僕自身は、キプツの多くの人たちに對して、深い感謝の気持ちに満たされています。この半年近くの間には、グループ内の数人にとって

心身共に不調の時期がありました。その時に、キプツの責任者及びファミリーの人達がよく我々に好意と理解を示し続けてくれたことに深い感謝を抱いています。

二道恵太郎君の自動車事故も不幸中の幸でした。後遺症は全くなく、彼の強い精神力と身体がよくこの不幸の時期に耐え、今は全快して元気にグループのリーダーとして健在です。四月二十五日より三泊四日のシナイ旅行に行つて参りました。死海の南端とその附近の光景は、想像以上の凄く美しい光景でした。エilatから始まるアカバ湾の美しい光景に、一同深い感銘をおぼえました。シナイ半島の岩山連峰の凄さに驚きました。そして、すき透るような海で水泳を楽しんだことは、生涯忘れられない思い出となるでしょう。

多くの日本青年男女が、イスラエルの様々の良い点を見学したり体験できたことに深い意義があると存じます。これらの青年男女が日本に立ちかえり、人間らしい社会生活と人間関係の正しい在り方を示してくれたらと願っています。

我々一同合議の上でグループ解散の時期を四月三〇日とし、現地解散をしました。現在一六名中五月初旬に他のキプツ（ウルバン生

**近江の歌祭り**

皆んなで創り  
皆んなで楽しむ  
『何でもコンサート』  
翌日は登んだ琵琶湖で  
全員参加の水泳大会

**日時・場所**  
7月28日(全) 夕方 南小松公民館  
7月29日(全) 昼すぎ 近江舞子浜

**持参品** 水着、楽器、洗面具  
**参加費** 宿泊100食費300雑費100

**交通** 京阪茨大津より、今津  
北小松行バス約50分  
近江舞子下車、すぐ

**連絡先** 滋賀県瀬田郡瀬田町北小松  
松あらし園芸療法部  
TEL: 07759-6-1145  
宿泊希望者は7月21日までにお知らせ下さい。

として)に移る者が二人、ヨーロッパに出るものが一人で、他の二三人は、約三ヶ月以上はこのままハツェリムに滞在します。これまで我々はキプツの西側に一同がかたまつて生活していましたが、今は二人づつ一組になりキプツの中心部の良い部屋に移転しました。ヘブライ語の授業は四月二〇日で終りました。ここに残る研修生の要望を入れて、新しい先生をベルシェバからよんでくれましたので、我々の人数が激減しない限り、ヘブライ語の授業も週に六時間続けてくれるそうです。四月三〇日グループ解散のささやかな内輪のパーティをしました。そして、静かに過去半年のイスラエル滞在生活と、出発前の準備期間の数ヶ月を振り返ってみて感慨深いものがあります。キプツの人たちや、イスラエル外務省の人達、A・A・研の先生方等々、本當に温顔と真心を以て接してくれた多くの人達に對し、尊敬と感謝の気持ちが新たにされて参ります。日本協同体協会の皆さんに對し、一同を代表してお礼を申し上げます。

**出発当時**、幼児であった我々キプツ研修生も、いまは一段と強く大きく成長しまして、キプツそのものを内側からより深く知るための一層の勉強を決定しております。中略後

## AAI東京セミナー

AAI(アジア・アフリカ共同組合労働問題研究所)東京セミナーが、イスラエルからAAI所長アキバ・エガー博士を迎えて、5月25日から27日まで、家の光会館で開催された。「協同組合運動と労働組合運動の将来と国際的役割」というテーマで開催されたこのセミナーに当協会からも奥村久雄が参加した。講義内容は本誌にも紹介される予定になって



いる。エガー博士はキブツ・ネツツエル・セレニのメンバーであり、また、キブツ研修生はAAIでお世話になった、顔なじみで、あのポリウムある体から、力強く確信に満ちた協同の理論が飛び出した。

26日のマスプロ講座は一般に公開され「高度産業国家における福祉社会実現のための協同組合と労働組合の役割」というテーマで、パネラーは、高橋正雄(経済学博士、九州大学名誉教授)、湧井安太郎(灘神戸生活協同組合専務理事)、和田春生(民社党機関紙局長、元国際自由労連A.R.O会長)、神代和俊(経済学博士、横浜国立大学教授)、藤沢宏光(中央協同組合学園教授)の諸先生。

テーマそのものが、あまりにも広範囲にわたるもので、パネラーの間でも意見が充分にまとまらず、時間的にも充分でなかった。最後に、コメンテーターのアキバさんが、「労働組合と協同組合運動が、単に組合員の利益を守ることに終止するならば、人間社会はよくならない。よりよい社会の建設という最終目的を忘れてはならない」と結んだ。

25ページより  
体をつくり、その中で生活していくことになっても、その中でふるまい方を心得ている。強い友好関係に基づいた共同体精神は、東山産業のような、かなり自由な結合体であるモシャブ・シトウファイにも見られ、そこを訪れ

た人は、はっきりと内部の事情がわからなくても、即座に、そのことを感じとる。その他の日本の共同体についても、大まかにとらえれば、少なくとも、似たりよつたりの雰囲気である。

ただ、宗教的共同体の場合は、特別な精神があり、それは明らかに宗教的なものであり、だれでも崇高な気分に向けられる。彼らは、容易に精神的な衝突をすることはできない。(たとえ反論することが不可能でなくとも、そこにあるものもまた教義の一つであるだろう。)

イスラエルには、ごくわずかの宗教キブツがあるだけであるが、ここで、我々はイスラエルのキブツを見てみよう。彼等もまた、もちろんこの結びつけるもの、崇高な心掛けを持っている。といっても、それは、ほんの小さな接点にすぎない。さて、今まで述べてきたように、概して、イスラエルのキブツと、日本の共同体の精神とか感情は、別々の性質を持っている。けれども、双方が、互いに全く関係を持っていないと、断言することは出来ない。イスラエルのキブツも、日本の共同体も、同じ密接な人間関係を持った共同体社会なのである。

## キブツ研修生家族会開催

五月一九日(土曜)午後一時より、東京新宿、家の光会館内において、第一〇回、第一一回



キブツ研修生家族の集いを開催したところ、出席者は東京付近

の在住者二〇名であった。定刻奥村主事司会の下に開催、先づ当協会の理事長宮部一郎氏が開催の主旨、及び本協会の目的や事業内容、そしてキブツ研修生派遣の状況、現地事情等を説明して挨拶を終わり、次いでイスラエル大使館所蔵の一六ミリ映画「キブツの近況」約四〇分、最近のキブツ協同体社会の状況を紹介します、更に日本のキブツ研修生がキブツにおける生活実況の写真五〇余枚をスライド映写で三〇分ほど紹介し、家族の方々に深い感銘を与えた様子であった。

午後二時三〇分より話し合いの会となり、先づ手塚理事から、

今の日本青年男女がなぜキブツに憧れを持つのか、キブツの思想

精神がなぜ日本の社会に必要なか、キブツの現状はどうか、中東紛争の実状、イスラエル国内の治安状態、アラブゲリラの近況等を約四〇分に亘って、見解、意見を加えて説明し、そのあと話し合いの会に入り、熱心に質疑応答が繰り返えされ、茶菓の会を終り、次回の会合を八月二〇日頃開催する事を決定し、午後五時散会した。尚この会に、最近ハツエリムから帰った百瀬直彦君と、九回生で昨年キブツ・バルカイに行き、グループ解散後、モシャブやエルサレムでの生活を体験して来た沖山京子さんも列席した。百瀬君は、ハツエリムグループのことを報告し、沖山さんは、家族の方々の個人的な質問に対して、自分が体験したイスラエルでの生活について対談した。

ごあいさつ

畠中正夫

こんにちは。今月号から制作部に入っています。どうぞよろしく、日本に帰ってきてから、まもなく一ヶ月を迎えます。いつも、ジリジリと暑かったイスラエルの天気、もぎたてのグリーン・フルーツ、未知の言語へブライ語、言いたいことが言えなかった苦しさ、それが通じた嬉しさ、日本語で意志の疎通ができなかった悲しさ、始めてのキスを交わした外国の女の子、生涯の友人が得られたこと、日本人一人で生活した時の厳しさ、ノイローゼ気味になったその頃、最後に一人でやった日本の夕べ、おり紙や切手、絵を並べ日本の歌を歌ったその夜。誕生日パーティーには、たくさんの方が集まってくれた。キーキやワインをプレゼントされ、モアドンで開いたそのパーティー、今はみんな夢のでき事。

# 協会日誌

5月1日 朝から力強い声が代々木の森から流れてくる。もろもろの要求をかかげたメーデーのひびき。いつになったら働くひとりひとりのための社会になれるのだろうか。協会の中は、月刊キブツのしめ切りに追われ、相変わらず忙しい一日でした。

5月2日 第八回生の和田順一君が京都より来訪。キブツ生活の美しいスライドを見せて下さる。

5月3日 今日は日本では休日だったとか。協会にいと、いつが休日か忘れてしまふ。

5月6日 備北百人委員会主催の共同体についてのパネルディスカッションが守口市民会館で行なわれた。見田宗介さんを招いて、コミュニケーション運動の問題点、百人委員会の方向などについて熱心に話し合われた。協会より

奥村が参加。弥栄郷では、生産物の広島での直販を消費者運動に高めていくような活動が始まったそうです。

5月7日 ユダヤセンターで行なわれたイスラエルの独立記念会に手塚さんと千賀子が参加。

5月11日 新聞関係に第十二回キブツ研修生募集の記事が掲載される。問い合わせの電話が鳴りどおし。

5月12日 山岸会より渡辺さんから三名の方が来訪。いま行なわれている幸福学園運動についてお話を伺った。

5月14日 北海道の第一期生、宮沢さんがひさしぶりに訪ねて下さった。

5月15日 このところ連日、キブツ研修希望の方が問い合わせに来訪。それぞれの中で何かを求めている若い方々で、狭い協会の中は熱気でいっぱいです。

5月19日 第十回、十一回研修生の家族会が家の光会館で行な

われる。約二十名の御家族の方と世話人として協会全員と、百瀬君、沖山さんが参加。キブツの映画、スライド、お話し合いなど。次回を八月に開催することにして五時に終了しました。

5月22日 十三日に帰国した第九期生、ギネガールグループの畠中正夫君が、今日から協会へ毎日出勤してくれることになる。忙しい協会にとつてうれしいことです。

5月25日 イスラエルのアジアアフリカ研究所長のアキバ・エガー博士を招いて、三日間のセミナーが家の光協会です。平日より行なわれる。協会から奥村が参加する。

5月26日 AAIセミナーの一般公開講座「高度産業国家における福祉社会実現のための協同組合と労働組合の役割」、アキバ先生の力強い言葉「労働運動は現社会の枠の中の自己の目的の利益獲得ではなく、より新

しい社会を創り出す運動体でなければならぬ」とつても印象的。手塚、千賀子、畠中が参加。

5月23日 いよいよ六月号発送の日。第九回生の千葉幸広君が学校の帰りに寄って、ずっと仕事をしていた。おかげで発送もスムーズでした。

5月27日 北海道より草刈善造先生がおみえになる。共同体運動のこれからの方向、協同体協会のあり方などについて、遅くまで話し合い、楽しい日曜日でした。

5月29日 研修生問い合わせの手紙が毎日20〜30通。返事を書くのに事務局はいっしょうけんめいです。郵便物がストの関係か、とても遅れているようです。待っている方に御心配をおかけしたようですが、送る方も、無事に着くかと、とても気がかりでした。百瀬直彦君、高須賀見子さん、澄んだ自然の待つ、那須自然農場へ出発。

# 編集後記

▽最近の月刊キブツについて、「キブツ一辺倒になっているのではないか？」とか「もって日本の協同体運動の実状をとりあげるべきだ」と警告してくれる人がかなりある。このように卒直な意見を聞かせてくれる人は、ほんとうにありがたい人だと思う。これらの声は今後の月刊キブツの中に生かして行きたいと思っている。泣きごとを言っても始まらないが、現在までの当協会のスタッフでは、正直に言っただけで日本を訪問する時間がない。最近ギネガールから帰った畠中正夫君が毎日来てくれることになり、我々にとつては大きな力である。

今回も本誌を編集しながら思ったことは、まず読者の皆さんにキブツを正しく理解していただきたいということ。

キブツは、聖人の集りではない。また、人間社会に派生するあらゆる問題を解決した完全社会でもなければ、空想家が頭に描くユートピアでもない。しかし、キブツは人類が求めつづけて来た理想を勇敢に実践し、改善に改善を重ねて現在の姿に到達した。キブツにも常に矛盾は存在する。メンバー達はその矛盾の一つ一つを解決しつつ進んでいる。

平等の原則と、人間のあくなき自由への欲求を如何に調和させるか？ 相互扶助の原則をどのように徹底させ、具現するかなど、彼等は常に真剣に考えている。キブツは決して固定したものではなく、動的なものとしてとらえるべきだろう。あるキブツの創設者は、「今から五十年六十年前に現在のキブツの姿を誰も想像できなかったように、六十年後、百年後のキブツがどのようなものになるかを予想す

ることは誰もできない」と私に言った。

キブツはその歴史の中で、集団生活形態の中で人間が直面するほとんどの問題を経験しており、日本に於ける協同体運動にまさる参考になると思う。今後もキブツメンバーの論文は、本誌の中にとりあげていきたいと思っている。

七月号の原稿を持って印刷屋に行こうとした時、ネティウ・ハラメッドヘイに行つたグループから、このキブツが研修生を受け入れるキブツとして、ふさふさという手紙が届いた。わしくないという手紙が届いた。早速、キブツとイスラエル側の委員会に連絡し、善処を依頼しなければならぬ。忙しい日定は、まだ当分続きそう。久雄

▽春の始め、冷たい朝に田舎から持ってきた小さなふきのとう。触れるのをためらうくらいに生まれたばかりの緑で、コンクリートのペランタに、ぽつと春が

ともつたように輝いていました。今大きなふきになって緑の葉をそよがせています。大地からこんなにも遠い空間でも、一握りの土が緑を育てています。

突然に土から切り離されて数ヶ月、ビルの中で机に向かい続けていると、何かがむしばまれていくような不安を感じ、むしように緑がいとおいしくなります。ふきの葉から、しずくが落ちています。今日は雨ふりです。なぜか安らぎます。豊かな緑の木々にいだかれていよう、やさしさに包まれます。緑が大地の上で伸び伸びしている時のように鮮やかに透きとおるからでしょうか。道で行きかう人々が、みんな昔からの友達のように急に親しく映ります。不自然さの迫ってくるバラバラなものを、ほんの一瞬でも、雨のしずくがひとつのものに結んでくれるからでしょうか。

千賀子